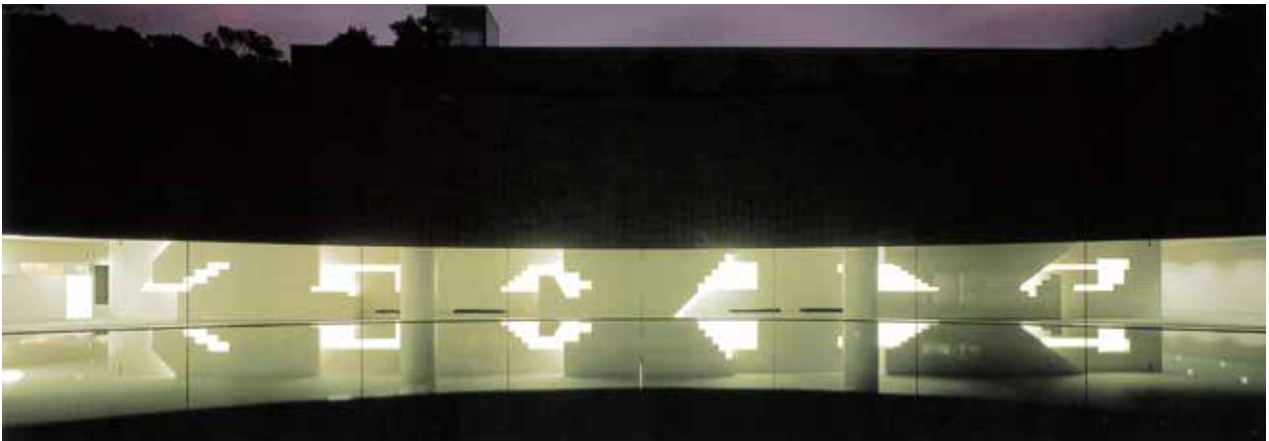


2023.7 no.95



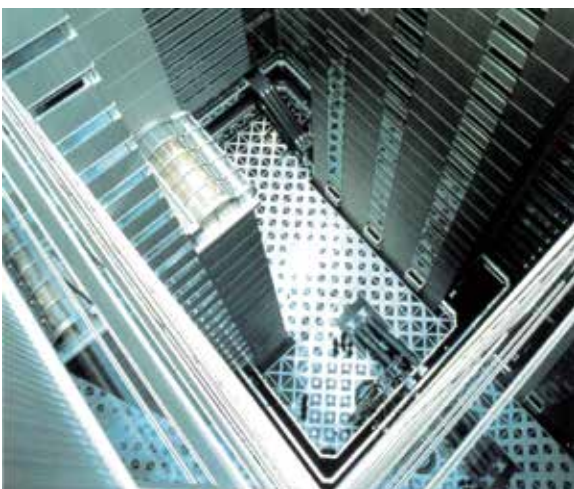
一般社団法人 日本建築美術工芸協会



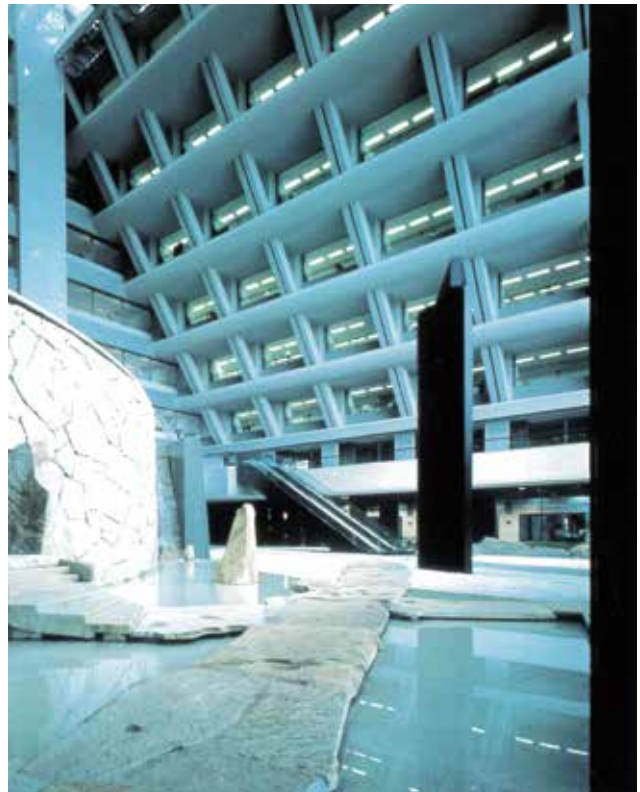
二重壁としての造形 1994年/三井海上千葉ニュータウン 本社ビル (現・三井住友海上火災保険ビル)



銅板による
壁面レリーフ
1995年/
JT 本社ビル



アトリウム内プラザの床模様のデザイン 1983年/新宿 NSビル



自然石と水でつくったロビー空間 1992年/松下電器産業情報システムセンター

第七回 日本建築美術工芸協会賞「三井海上千葉ニュータウン本社ビル他、一連の建築における空間造形」
(会報 No.25 1998年3月号より)

日本建築美術工芸協会賞は、日本建築美術工芸協会の目的に合う建築家、美術家、工芸家その他の人々の連携・協力によって優れた芸術的環境（建築・庭園・インテリアその他を含む）を創造した、あるいは優れた芸術的環境に関し多大な業績があった個人またはグループが選ばれます。

第七回 日本建築美術工芸協会賞受賞（1997年）

受賞作品 三井海上千葉ニュータウン本社ビル他、
一連の建築における空間造形
受賞者 片山利弘・（株）日建設計

〈選考委員講評〉 委員長 内井昭蔵
委員 曾田雄亮 栄久庵憲司
近江 栄 澄川喜一（敬称略）

建築空間とアート作品が渾然一体となって融合する成果に到達したのは、あらかじめ建築のプロセスに於いて、建築家小倉善明氏と片山利弘氏の意図する空間の演出について話し合いが重ねられた結果であった。

これまでは、一般的には必ずしもこうした経緯ではなくアート作品が竣工の隙間空間にアクセントとして設置されることが多く見られるが、建築内外空間とのミスマッチに終わることも少なくない。

三井海上千葉ニュータウン本社ビル及び松下電器産業情報システムセンタービルに見られる片山利弘氏と建築設計者は、十分な意見交換を経て、空間の大きさや広がり、照明や素材感の表出など、建築空間の造形として、これまでにない演出で成功に導いている。

贅をつくすことではなく、きわめて知的で静謐なそしてぬくもりを感じさせるアート作品として、受賞作として推奨された。



現・三井住友海上火災保険ビル



新宿 NS ビルアトリウム



新宿 NS ビル床模様のデザイン

(撮影：飯田郷介)

CONTENTS

■令和5年度 定時総会

令和5年度 定時総会	4
令和5年度 協会組織図	6

■会員活動レポート

イメージを形に…想いをかたちに	中村典子	7
アートワークについて	市村陽子	8
軽やかに50年 一染・すずきあき展を終えて	すずきあき	9
展覧会活動報告		10

■法人会員の企業活動を訪ねて

YKK AP 〈Part 1〉	広報委員会	16
-----------------	-------	----

■フォーラム委員会だより

第201回 aaca フォーラム開催報告		
子供たちにつなげる「アートと社会の共存」への想い	萩尾昌則	18

■会員交流委員会だより

「船上から東京を見上げる会」に参加して	大草徹也 竹内 泰	20
---------------------	-----------	----

■会員増強委員会だより

第8回 aaca サロン開催報告		
ランドスケープとライティングデザイン		
それぞれの環世界	山田修爾	22

■広報委員会だより

丸山耽奎為 青森県立美術館展覧会	広報委員会	23
------------------	-------	----

■事務局だより

		24
--	--	----



▶ 4



▶ 16



▶ 18



▶ 20



▶ 23

令和5年度 定時総会

- 日 時 令和5年6月8日(木) 15時00分～16時30分
- 場 所 建築会館ホール(東京都港区芝5-26-20)
- 議 長 東條隆郎(会長)
- 議事録署名人 重岡公二、北田幸治
- 進 行 総務委員長 小谷純造
- 会員総数 332名(個人会員239名、法人会員93名(社))
- 総会成立定足数 221名
- 出席者数 235名(出席会員54名、議決権行使書提出会員110名
委任状提出会員 71名)

東條会長 挨拶



本日は令和5年度定時総会にお集まりいただき誠にありがとうございます。

3年に亘るコロナ感染症もこの5月より感染症法の5類に位置付けられ、ようやく従前のような日常が戻ってくるものと期待しています。さて、

昨年の当協会の事業活動はコロナによる様々な制約がありながらも、期初の計画に基づき実施することができました。これも会員各位の方々のご協力と御尽力によるものと思います。その活動のいくつかをご紹介します。

まず、AACA 賞表彰事業ですが応募数は58件、その中で数々の優れた作品の中から、最優秀である AACA 賞には南軽井沢にある「写真家のスタジオ付き住宅」が選定されました。審査総評では、「建築家が独創的な空間を提案し、さらに写真家がそれを相乗的に使いこなすという、いわば創造的な協働による素晴らしい作品である」また、審査員の米林副会長からは、設計者は「森の秩序に基づいてつくった動的な場を表現している。シンプルで明解な建築で、森の中によく溶け込んでいる。内部に入り、まず気付くのは自然との一体感だ。曲面ガラスの開口部は、内と外の視角的、さらには心理的交歓が育まれる様に、小気味好い空間構成だ。スタジオとしても住宅としても魅力的で、住む人が楽しみながら大切に作り上げてきた空間と時間を感じた」とあります。AACA 賞に相応しい作品であり「建築・美術・工芸が一体となった総合的な芸術空間を創る」という aaca の理念を体現しているような素晴らしい作品であると思います。

このように「美しく豊かな環境、空間を創ることの価値を社会全般に発信し伝えていくこと」このことが AACA 賞表彰事業の根幹であります。

6月には第5回 BOX 展が開催され、多くの出展がありました。現在第6回の BOX 展が、会館の1階ギャラリーで開催されています。是非ご覧いただき、作家が作品に込めた想いを感じ取っていただければと思います。この BOX 展は30cm角の空間に、焼き物・ガラス・金属、刺繍・染色・皮革・紙、木など得意な素材を使い、建築・建築素材、美術、工芸、

学生の方などジャンルを問わず参加・交流できる、大変ユニークな展覧会となっています。

また、その時々注目される事柄をテーマに「aaca フォーラム」の開催や、全国各地で進行している様々な特徴ある「地域の取り組み」に焦点をあて、「地域の活性化・魅力的な環境」をいかに創り出しているかなどについて「地方創生が生み出す景観」をテーマに、講演会やシンポジウムを開催しました。現在その書籍化を進めています。

次に、会員交流の取り組みとして、建物視察会のほか、新たに陣内先生のご案内による隅田川、神田川、日本橋川を巡る「船上から東京を見上げる会」、AACA 賞受賞作品視察会「zozo 本社」を実施しました。会員の研鑽とともに会員相互の交流を図りました。

情報文化研究委員会では、変化の激しい都市における人の営みの中で、心に残る変わらないものの一つとして「池」をテーマに現地取材やヒアリングなど1昨年より精力的な研究活動を続けています。

ただいま報告しましたように様々な事業活動が活発化してきました。しかしながら、コロナによる様々な制約が大きな要因と考えておりますが、誠に残念ながら当協会の令和4年度決算は3年続けて赤字となりました。

今年度は、これまでの経緯を踏まえ収支改善を図りながら、コロナ前のような状況に戻ることを目指し活動を進めていきたいと思っております。

昨年度より外部への発信媒体である「広報誌」「ホームページ」をより AACA に相応しいイメージ・内容に改変し、会員の皆様・外部への情報発信を高め、会員の皆様に、より身近なものとなるよう取組を進めています。今年の秋以降順次新たなものになる予定です。

また、今年度の目標の一つとして協会が掲げている「文化的な空間創造のための1パーセント運動を提唱する」という活動を前進させる取組を進めてまいります。当協会だけではなく、意を同じくするほかの団体、方々とも連携をはかりながら取り組んでいきたいと思っております。

令和5年度はコロナ感染も収束し、日常が戻ることを期待しています。当協会の各事業におきましては、この3年間に亘る経験をもとに、多くの会員の皆様が参加し交流できる活発な活動を進めていきたいと思っております。ありがとうございました。

審 議

- 第一号議案 令和4年度事業報告に関する件は和出専務理事より提案。
- 第二号議案 令和4年度 貸借対照表、財産目録、正味財産増減計算書、及び収支計算書に関する件は二本柳事務局長より提案。
令和4年度の会計及び業務について監査報告は監事を代表して山崎監事より報告。
議長より採決を諮ったところ、第一号・二号議案は原案通り満場一致にて承認可決された。
- 第三号議案 長期会費未納会員の取り扱いに関する件は二本柳事務局長より提案。令和2年(2020)から令和4年度(2022)の3年間に涉り会費未納会員3名に対し書面にて会員の継続の意思の確認をしたところ 1名の方から継続の回答があったが2名からはなかった。従って2名を退会者と扱う事を議長より採決を諮ったところ、第三号議案は満場一致にて承認可決された。
- 第四号議案 令和5・6年度 理事・監事選任に関する件は議長より提案。
議長より、下記の理事・監事候補者が提案され採決を諮ったところ満場一致にて可決された。
理事 岩井光男、北 典夫、清野明男、
児玉 謙、芝山哲也、菅 順二、
東條隆郎、中野恵美子、中村 純、
中村弘子、日置 滋、堀越英嗣、
松村正人、三塩達也、本 耕一、
森 暢郎、山崎和子、山本茂義、
米林雄一、和出知明 以上 20 名
監事 尾崎 勝、森田高年 以上 2 名

報 告

令和5年度・6年度 役員紹介

同日別室にて開催された、第二回理事会に於いて互選により決定された役員、及び理事・監事を、東條新会長から出席者に発表された。(新任以外は重任、五十音順)

会長(代表理事)	東條隆郎
副会長・理事	岩井光男、森 暢郎、米林雄一
専務理事	和出知明
常務理事	芝山哲也、本 耕一
理 事	清野明男、菅 順二、中野恵美子、 中村弘子、日置 滋、松村正人、 山本茂義、北 典夫、児玉 謙、 中村 純、堀越英嗣、三塩達也、 山崎和子
監 事	尾崎 勝、森田高年

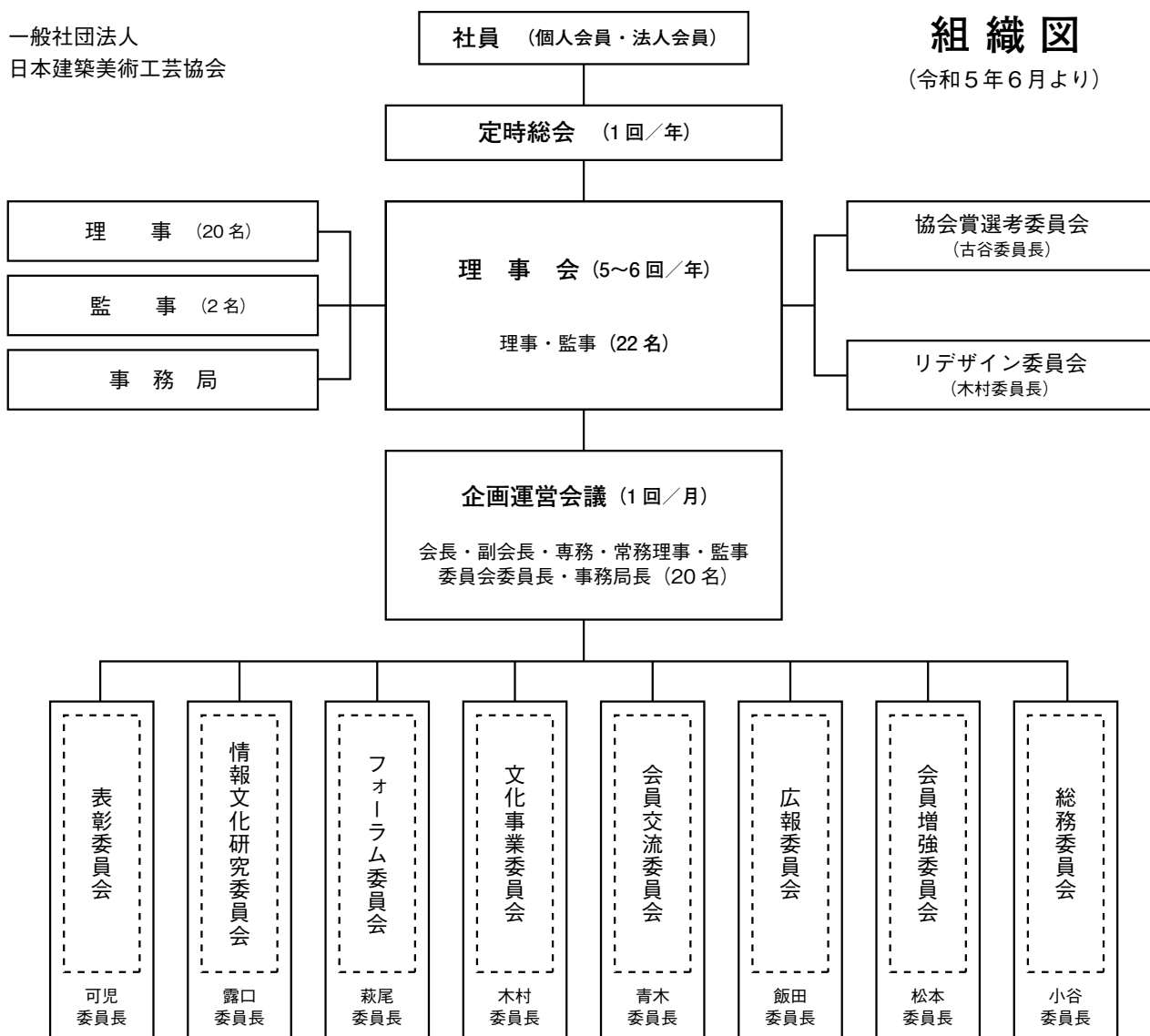


令和5年度 協会組織図

一般社団法人
日本建築美術工芸協会

組織図

(令和5年6月より)



会員活動レポート

イメージを形に…想いをかたちに

皮革造形作家
現代工芸美術科協会本会員
日本建築美術工芸協会会員
中村典子



私は高松で皮革を素材に制作活動をしております。学生時代も四国で過ごした私は、アルバイトでお金を貯めて長期休みには東京に建物を見に行くのが楽しみでした。バブル時代…刺激的な商業建築が都会には溢れていました。

東京に就職し、建築中の都庁を見ながら新宿 NS ビルや幕張テクノガーデンで3年程勤めた後は高松に帰り、専門学校で30年近く色彩や保育の学生さん達と図画工作…そしてインテリアの学生さんたちとウィンドウディスプレイの作品を創ってきました。

30cm角の空間をいろんな素材で構成・デザインする BOX 展には今年から新しい職場となるので、最後の記念に出品させて頂きました。「平和の架け橋」は葉一枚ずつが連なって、みんなが手を繋ぎ、地球に大きな橋が架かり、天空に花を咲かせるイメージで制作しました。コロナ濃厚接触者となり授賞式には行けなくて…とても残念でした。

大学時代には金属工芸を専攻していた私が皮革という素材に出会ったのは30歳の頃。皮革造形で文化勲章を受章された大久保婦久子先生に習っていた先生が高松で現代工芸美術展や日展で活躍されていました。その頃に建築美術工芸協会のことを知り、当時の私にはまだまだ縁遠く感じておりましたが、今回入会させて頂くことになり、とても嬉しく思っております。

金属は過熱すると柔らかくなる…皮革は湿らすと柔らかくなり…どちらも伸びるところが似ていて面白さを感じています。もう先生が亡くなって8年。皮革に出会って25年。最近やっと納得出来る作品が創れるようになってきた気がしています。

作品のテーマですが、2010年からは「月夜の海に」というシリーズで制作してきました。私の生まれたさぬき市志度度は四国86番札所補陀落山志度寺の門前町です。平安時代より志度湾は極楽浄土に繋がっているという言い伝えがあります。2009年に志度寺縁起絵巻全国サミットがあったのもきっかけでした。

2012年には3R推進中四国大会に学生達のリサイクルオブジェを展示させて頂く機会がありました。(NPOグリーンコンシューマー高松さんとの協働)地球環境について考えるようになり、私の作品も、雨が降り…雲となり…また恵の雨となり…という自然の営みの循環がテーマとなっていきました。

大学時代の卒業制作からずっと平面作品だった私が2020年からは立体作品に取り組むようになり、「海から宙へ」というシリーズで制作しています。kumokoちゃんが波に乗ったり、月の舟に乗ったりしながら登場します。次はどんなシチュエーションで…と考えるのが最近は楽しみとなり…もう暫くは制作が楽しめそうです。

今、香川は御誕生所善通寺を中心に「弘法大師空海誕生1250年祭」で盛り上がっています。10年程前に四国88か所を巡りましたが、父と休みの度に「区切り打ち」で4年もかかって高野山にたどり着きました。現在は全国一宮巡りを昨年から始めましたが…仕事の合間にゆっくり楽しみながら…各地を巡って…新しい作品も創っていければと思っています。



「月夜の海に」



「海から宙へ」



第5回BOX展入賞作品

アートワークについて

Ergo 代表
アーティスト
日本建築美術工芸協会会員
市村陽子



2015年の株式会社モノグラフ設立より、インテリア空間のためのアートワークを企画制作してきました。2020年からは「Ergo」（エルゴ）としてブランドHPと専用スタジオを開設。以来、飲食店やオフィスなどの多様な空間にアートを提供してきました。

アートワークの内容は主に、平面作品（絵画含む）、ディスプレイ、オブジェ、フラワーアレンジメントです。中でも平面作品はErgoの制作物の主軸であることから、技法と素材を研究し、ステンシルやマーブリングから着想を得た独自の表現方法を確認してきました。また、そのように制作した原画を高解像度スキャンして、クロスやキャンバスプリントにデジタル加工する場合があります。その時の空間のデザインコンセプトを伺い、適した技法を組み合わせて制作しています。

Ergoが制作するアートの役割は、インテリア空間をより豊かにすることです。ただ物質としてそこに存在するだけでなく、造形的に周囲と呼応していること、場所のストーリーを内包していること、癒しや感動、驚きなどを与え、人のエモーショナルな部分に働きかけるような精神的価値を提供できることが重要であると考えています。

そのため制作の際は、空間のデザインコンセプトを起点として、デザイナーの意図を汲みながらアートワークのコンセプトを組み上げていきます。同時に、それに即した色彩とマテリアル、技法の選択を試みます。そうすることで、その空間の固有性に付随した造形表現とストーリー性を纏った、機能的な表情を持つアートワークを目指すことが可能になっていきます。

また、私は自主制作を行うアーティストとしても活動をしています。アイデンティティを制作の起点として、社会背景やアートの文脈を意識した上で作品コンセプトを考え、個人的な作品として表現しています。

アーティストの作品は独自性や強いインパクトを持つものもあり、作品の背景には深い思考と視座、時間軸が読みとれます。そういった個性が表現された作品も、インテリア空間に提供していきたいと考えています。アーティストの世界観が、空間デザイナーや建築家の方々と交わることで、新しい表現、新しい視点が生まれていくことに希望と可能性を感じています。様々な空間に多様なアートがあることで、互いの境界線を越え価値観を共有できるような豊かさが生まれていくことを実現していくべく、活動していきたいと思っています。

aacaではフォーラム委員会に参加し、シンポジウムやサロンにも積極的に出席させていただいています。建築と美術、工芸に関わる会員の皆様との交流は、多くの学びがあります。今後もたくさんのごことを勉強させていただき、活動に生かしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



ARTWORK (painting) by Ergo
-Residence in Yokohama- 2023



ARTWORK (digital wallpaper) by Ergo -balangan Method- 2021



ARTWORK (mixed media) by yoko ichimura -KORERU- 2022



軽やかに 50年 一染・すずきあき展を終えて

染色家
日本建築美術工芸協会会員 すずきあき

布に色が浸透し重なる色同士が混色されて微妙な色を生み出す－それが魅力的で続けているうちにいつの間にか50年も経ってしまいました。染める作業がイコール日常で自分にとっては当たり前的事だっただけに、その長い年月に驚きはあっても実感も重みもまるでありませんでした。ただ思い返してみると自分が本当にやりたい自由な制作が出来るまで、ずいぶん遠回りした気がします。

染の伝統技術を着物の職人さんの世界で3年間学び独立してから着物の仕事を日々こなしながら、ずっと持ち続けていた自由な表現への渴望。そうしたなか脱皮を目指してイタリア・フィレンツェに渡り33歳で再び学生になりました。その地に降り立った時、沢山の拘束やしがらみから解放された身体がフワリと浮いた様な軽やかさを感じました。

日本を離れた事で日本の伝統や文化を再認識したと同時に異文化に触れ発想の転換が出来た事で養われた自由な感性は、揺るぎない原点になりました。

50年を振り返ってみると着物の仕事から始まり、ウィンドディスプレイ、店舗のパネル、企業内の表示プレートや壁面装飾、インテリアとしての暖簾やタペストリー、身につけるウエア、ストールなど染める仕事は何でもこなしてきました。染色で身を立たいという気持ちが強かったからですが、やりたい自由な制作が後回しになった事も事実でした。

「軽やかに50年」と題して染50年の記念展を今年3月に新宿の京王プラザホテルのロビーギャラリーで開催しました。このギャラリーとの出会いは10年前で高い天井と広い壁面を持つロビー空間と併設する独立したギャラリーとの両方へ展示が可能で、ロビー全体で作家独自の雰囲気が出せるというのは魅力的に思えました。

思えばその頃から自分が望んでいる作品を少しずつ制作し始めていて、このギャラリーとの関わりが出来ると空間や広い壁面などをより意識する様になりました。そして1年ごとの個展を重ねるごとに自分が本当に望んでいた作品制作が出来るようになっていきました。

今回の記念展に特別なことをする事は考えていませんでしたが「50年は半世紀なのだから何か節目となる様な事を」とギャラリーの担当者からギャラリートークのご提案をいただき、当たり前で過ごしてきた染の半世紀の流れや技法などをお話する機会を得ました。

ロビー空間には過去10数年の代表的な作品、ギャラリー内には新作を展示し、お集まりいただいた皆様と一緒にロビー空間からギャラリー内へと私の過去から現在までお付き合いいただきました。

又今回ギャラリートークにご参加いただきました aaca の飯田様より会報への執筆のご依頼をいただきました。自分の仕事の50年を語る機会を与えていただき、とても良い記念になりました事を心から感謝いたします。



展覧会活動報告

■ 米林雄一展

会場：愛知県立芸術大学サテライトギャラリー
会期：1月28日～2月12日

「米林氏の宇宙的な広がりを想起させる作品は、観者の想念を、時空を超えた領域へと解放しながらも、今ここへ、と帰着に導く軌道を示しているようです。代表作の一つの《微空音一Ⅱ》(1987—92) はじめ、初期の《椅子と机》(1974—76)、《CAT》(1978) を含む作品を展示し、米林氏の創造の軌跡を辿ります。」(主催者)



《微空音一Ⅱ》の前で



■ 色の美学・形の詩学 Part10

会場：ギャラリー志門
会期：1月30日～2月4日



山崎和子《Next Time-23》(麻・ポリエステル)



犬飼三千子《Merge》(ベニヤ アクリル 樹脂ボンド)

■ 第24回島田恭子陶芸展「春はあけぼの・・・」

会場：日本橋高島屋本館美術画廊

会期：2月8日～13日

「先生を象徴する桜文様の作品は、日本人ならではの美意識と詩情性に溢れ、多くの陶芸ファンを魅了し続けております。『春はあけぼの・・・』と題した今展では、枕草紙から想を得、先生独自のエッセンスも加えて制作された温かい雰囲気を感じさせる作品の数々を発表いたします。」（主催者）



《桜文器》の前で

■ 深尾雅子 Textile Art Exhibition — 再考・最高・再構 —

会場：いりや画廊

会期：2月20日～25日

「今ここで立ち止まり再考し 新たに最高のものを求めて 次へと再構する」



《白蓮華曼荼羅》の前で



《変貌》、《融合》、《記憶の累積》

■ 版画家 Allumage 展

会場：K'sGallery

会期：2月27日～3月4日



犬飼三千子 《不思議な夜》

■ 横浜マイスター平山健雄

ステンドグラス制作活動50周年記念展

会場：横浜市役所3階市民ラウンジ

会期：2月28日～3月4日

「色ガラスは素材ではなく媒体。素材は光。横浜の光は海が近くオゾンが豊富でマチスが晩年制作拠点にしたコートダジュール郊外の光に似て美しい。夕焼けに染まる富士山を眺めながら眼を東に転ずると夕闇が迫ってくる。光は闇を呼び闇は光を求める。横浜に光への文化が根付くことを希求している。」(平山健雄)



■ 梶原真理・高須好子・宮野智之三人展

会場：のばな

会期：3月20日～25日



高須好子



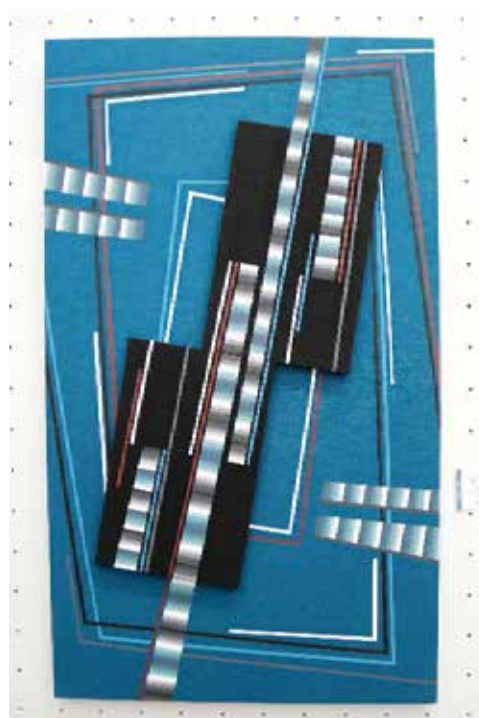
■ 第 61 回日本現代工芸美術展

会場：東京都美術館

会期：4月19日～24日



山崎輝子 《The DOOR》



山崎和子 《Ever Changing Time 23》



神 まさこ 《溢れる想いⅡ》



品川未知子 《縄文の祈り・・・悠久》
(現代工芸本会員賞)

■ スペース X 展 2023

会場：ギャラリー檜 F
会期：4月17日～22日



上江洲牧子



■ 高橋幸子 油絵展

会場：京王百貨店 京王ギャラリー
会期：4月20日～26日



「古都京都、奈良の美しい佇まいを中心に日本の織細で優雅な風景を心を込めて描かせていただきました」高橋幸子

■ 神 芳子バスケットリー展

会場：Gallery 鶉

会期：4月24日～28日



■ 「ファイバーアートの15人」展

会場：京都文化博物館

会期：2023年5月16日～23日

京都文化博物館5階の広大なスペース全体を使って、繊維を素材とした作品が1人約10mの壁面に各数点ずつ展示される大規模な展示が行われた。このような大規模のファイバーアートの展示会は、国内ではきわめて稀で、ファイバーアートの魅力と可能性を伝える良い機会であった。aaca会員の岡本直枝、中野恵美子が出品した。



岡本直枝



中野恵美子

YKK AP 〈Part 1〉

広報委員会

2015年に入会されたYKK APは、YKKグループの中核会社の一つです。YKKといえばファスナーが思い浮かびますが、そのファスナーを手がけるファスニング事業を担うYKK株式会社と「窓やドア」、「ビルのファサード」など、さまざまな建築用プロダクツを扱うAP（建材）事業を担うYKK AP株式会社で、海外71か国・地域に88社を展開されています。YKK60ビル（東京都墨田区）、「技術の総本山」のYKK黒部事業所（富山県黒部市）などを訪問し、将来に向けたビジョンを伺いました。

YKK創業者「世界のファスナー王 吉田忠雄」の経営哲学

現在のYKKを創業した吉田忠雄は、企業は社会の重要な構成員であり、共存してこそ存続できると考え、自らの哲学「善の巡環」を実践するための方法論として、企業活動で得られた付加価値の分配先として顧客、取引先と、経営者や社員を含む自社の3者に分配する「成果3分配」を唱え、企業理念としてきました。

吉田忠雄は、1908年（明治41年）、三人兄弟の三男として富山県魚津市で生まれました。1928年、吉田は魚津から上京し、中国陶器輸入商、古谷商店に勤めますが、やがて古谷商店の倒産を受け、1934年、25歳のときに日本橋蛸殻町でサンエス商会を設立し古谷商店が扱っていたファスナーの残品を譲り受けて独立しました。従業員たった2人のスタートでした。そして1938年には、江戸川区小松川にファスナーをつくる工場を建設し、社名を吉田工業所としましたが、1959年には、生地工場（現在のYKK AP黒部製造所）で、アルミ溶解およびアルミ押出の操業を開始して、建材事業が始まり、ビル用サッシ・カーテンウォール、エクステリア商品など商品展開を大きく広げ、現在のYKK APの基礎が築かれました。

「サッシメーカーから窓メーカーへ」

1957年7月、吉田工業（現・YKK）の製造したファスナーの輸出・営業部門として吉田商事（現・YKK AP）が設立され、1959年11月、アルミ溶解・押出の操業を開始し、YKKの建材事業が始まり、1962年には、ビル用アルミサッシの生産・販売が開始されました。1966年4月、住宅用アルミサッシの生産・販売が開始され、1969年には各種サッシ用部品の生産も開始され、複層ガラスやビル用サッシ・カーテンウォール、エクステリア商品など、商品展開も大きく広がっていきました。そして1990年、YKKグループにおける建材事業の中核会社としてYKKアーキテクチュラルプロダクツ株式会社が設立され、大量生産・大量消費のプロダクトアウトから、多様化する消費者ニーズに応えるマーケットインへ体制を転換しました。そして「サッシメーカーから窓メーカーへの転換」を掲げ、ノックダウン方式のサッシ供給事業から、完成品としての「窓」を供給する窓メーカーとして舵を切りました。また2008年には超高層・高難度のカーテンウォールに対応するファサード事業を本格展開させました。東京汐留での再開発プロジェクトにおいて、多くのビルのカーテンウォールを手がけ、東京スカイツリー®では、高さ450メートルの位置にある「天望回廊」のファサードを手がけられ、また名古屋駅前の「モード学園スパイラルタワーズ」では、三角形のガラスを7,145枚使い、文字通り螺旋の外観を実現しています。また、「川上遯上主義」という製品の質を高めるために、窓やサッシからねじに至るまで材料や機械まで内製化され、窓サッシでは、フレーム部分のみならずガラスの原板を調達して加工、自社工場でそれらを組み合わせて窓を完成させて出荷されています。そして、さらにエクステリアやリフォーム商品の拡充、ビル事業のエンジニアリング力強化などが図られています。



YKK60ビル



YKK60ビルアトリウム

（撮影：飯田郷介）

「国内外の建築家との幅広い交流」

YKKグループでは、国内外との建築家との交流を通して、良い商品づくりに繋がっています。YKKグループが、商品開発の拠点として1993年にオープンした「YKK R&D センター」(現・YKK60ビル、東京都墨田区)は、設計・開発部門が入るオフィスと、取引先に向けてのプレゼンテーションに利用される多目的ホールやギャラリー、遠隔地からの会議参加者のための宿泊施設から構成されています。横文彦が設計したこの建物の各立面の印象がそれぞれ異なり、とてもひとつの建物とは思えない、ボリュームをもつ立体が造形の構成要素になっており、横文彦が「ひとつひとつの建築が都市性というものを自己増殖させながら、総体として都市がつくられる」と語る都市との関係を重視した建築づくり「建築の都市性」の代表作でもあります。建物の外装はYKKアーキテクチュラルプロダクツが横事務所の協力により開発したアルムコルゲートパネルが使用されています。



黒部市に、外国人研修生の寄宿舍やゲストハウスとして建てられた「前沢ガーデンハウス」(1982年)も横文彦による設計で、今でも見学者が絶えない名作となっています。「前沢ガーデンハウス」は、「様々な国から人々が集まる大きな家」というイメージで設計された3階建ての白を基調とした建物に、ゲストルームの大きな窓が印象的なデザインとなっています。南側の庭に面した吹抜けの空間「マルチパーパススペース」がこの建物の中心になっており、この空間をL字型のゲストハウスゾーンと研修ゾーンが囲み、この空間を介してすべての諸要素が視覚的に関連づけられています。YKK創業50周年の1984年来日されたジミー・カーター元アメリカ合衆国大統領も宿泊されたことがあります。

1989年につくられた野外ステージは、約300席の半円形平面の階段席と円形舞台で構成されています。この野外ステージでは、劇団SCOT主宰の鈴木忠志による野外劇も開かれ、また2019年には世界各国で活躍する演出家・劇作家による国際的な舞台芸術の祭典である「シアター・オリンピックス」の第9回が日本とロシアで共同開催された折は、富山県利賀村(現・南砺市)と共にこの野外ステージで開催されました。

YKKグループが整備を進める「パッシブタウン」の第2街区の設計も横文彦が担っており、住宅街に現れた商業棟を持つ集合住宅は、地域の方から「黒部の代官山」とも言われているようです。このほか、YKKグループの施設では、ヘルマン・ヘルツベルハーなど多くの国内外の建築家が手がけています。

(文責：飯田郷介)



マルチパーパススペース



野外ステージ

(撮影：飯田郷介)

フォーラム委員会だより

第 201 回 aaca フォーラム開催報告

子供たちにつなげる「アートと社会の共存」への想い

講師：絹谷香菜子氏

2023年3月9日(木)18時～19時30分(サンゲツ品川ショールームにて) 三菱地所設計 日本建築美術工芸協会法人会員 萩尾昌則

絹谷香菜子さんは講演会当日、「中学二年生の時に興味を持った」と語るラピスラズリを思わせる青の装いで登壇されました。コロナ禍が第8波も落ち着きつつあり、もう少しでマスク着用は自己判断となる本年3月9日(木)に、株式会社サンゲツ様のご厚意で品川ショールームのホールをお借りしながら、第201回フォーラム『子供たちにつなげる「アートと社会の共存」への想い』は開催されました。

絹谷香菜子さんは、ご紹介するまでも無く、現代洋画壇の巨匠・絹谷幸二氏を父に持ち、ご自身も現代日本画家としてご活躍されています。そんな絹谷さんご自身が語られる「想い」に期待を集め、50名程度の聴衆が集まりました。1時間30分にわたり、実に雄弁に多様なことをお話いただきましたが、ここではその一部をご紹介します。

絹谷香菜子さんは『生命を見つめる』

繊密な画風の動物画でも知られる絹谷さんは会場に2点の絵画「ブードル」「フラミンゴ」を展示されました。

これから画家自身の口から語られる物語を拝聴する前に、実物というリアルな実態が雄弁に「絹谷香菜子」さんを語ります。

その緻密な筆遣いは、まるで顕微鏡で細胞まで見通したような繊細さが感じられ、また漆黒のように見える背景も幾重にも層を重ねた重力場のドレープのようで観る者を魅了し吸い込みます。

絹谷香菜子さんはきっと科学者の目を持っているのでしょう。彼女の眼に捉えられる世界が素粒子にまで分解され、絹谷香菜子という画家の中で再構築される。その絵に漂う写実とは異なる不思議な細密さが感じられるのは、絹谷香菜子さんの画家としての眼差しで生命の揺らぎを捉えているから。

絹谷香菜子さんは自作の紹介でも「動物たちの毛一本一本、瞳孔奥深くまで想いを込めて描き、その動物に自己を投影し、

一体となれる感覚まで持っていきたいと思いながら筆を動かし続けています。動物を見つめる事で自己を見つめ、そしてまた反芻して動物達が見るこの世界の事に思いを馳せていただきたいと願っています。」と語ります。

絹谷香菜子さんは『日本の伝統を伝える』

幼少の頃より「水が大好き」だったと語る絹谷さん。水の気持ちを知りたくて子どもの頃に金魚を口に含んだエピソードには驚かされますが、学生の頃の海底などの海の絵を映写しながら「石の美しさや水の気持ちよさを着彩しては上手く表現できない」と思い、「色の無い世界で色を見つめる」べく墨を中心とした画材に傾注するようになったとのこと。父・絹谷幸二氏は、その名作の「富士山」を描く紅は砂鉄で出来ていることを香菜子さんに教え、「すべては循環している」と伝えたそうです。そのことに感銘を受けたという香菜子さんは、講演の中でも持参していただいた様々な日本画の道具をテーブルに並び、自然由来の素材の成り立ちを説明されましたが、そこには「循環する自然を愛おしむ」眼差しが強く感じられました。

絹谷香菜子さんは『自分と世界をつなげる』

ロンドン留学時にロッド・ジャドキンス(日本では『クリエイティブ』の処方箋)で知られる)に師事した絹谷さんは、「あなたのアイデアは、いつどこで生まれたの?」と突き詰めるように導かれ、コンセプトの大切さに気付かれたとのこと。イギリス北東部の都市ゲーツヘッドにあるエンジェル・オブ・ザ・ノース(アントニー・ゴームリー作)を例示しながら、「単に美しいものをつくるのではなく、社会と結びつき、自分と作品と社会がつながる」創作をしなければならない、と考えるようになったそうです。

また、ロンドン留学中に、美術館の中の子どもたちのワーク



ショップに遭遇し、美術の中で美術の授業をするのではなく、絵がある空間で自分たちの国の政治の話をしている光景に接し、「アートの影響とは、直接的な影響だけでなく、のちの人生にじわじわと間接的に新しいアイデアや心境の変化を誘発するもの」と気付かれたそうです。

絹谷香菜子さんは『愛の伝承者』

絹谷香菜子さんの講演の節々に父・絹谷幸二さんやご家族からの影響が感じられます。

「洋画家である父は作画中の絵を立てて制作しましたが、日本画は床に拡げて上から俯瞰しながら制作します」と語る彼女の背後には父親の温かい眼差しが感じられ、子供の頃の思い出と共に語るのは愛されて育った記憶です。大学で美術教育を学び、ロンドンでコンセプトの大切さに気付いた絹谷さんは、一時は子どもたちに美術教育を行っていたそうですが、「教えた生徒にしか影響が及ばない。もっと広く社会と関係したい」と感じるようになり、画家として生きる道に歩みを進めたそうです。

経歴として語られるそれらの物語からは、絹谷家の愛情を受け継いだ香菜子さんが、その愛を世界に伝承していく、そんなアナザーストーリーが見えてきます。

そして、未だ先行きの見通せぬウクライナ紛争。この紛争への無力感、ウクライナの友人への思いなどから、香菜子さんのお子さんと共作した『戦争を止めよう Stop the Tank 2022』は愛の伝承の最たる結晶と言えるのではないのでしょうか。

この画は当時4歳になる息子さんと「大砲から砲弾を出すのではなく花を振りまいてお花畑にして、戦車を方舟にして人々を幸せにしよう。」と言いながら描いたそうです。熊はアイヌでは人間の祖先とのことで、「人智の及ばない神聖な生きもの」として「戦車を止めるための神獣として選んだ」とのこと。こ

の発想力、愛の伝承、作品のつくり方、それらすべてが人類の未来の可能性への期待感・希望を感じさせてくれます。

絹谷香菜子さんの『これから』

現在多用される「日本絵画」という言葉は、フェノロサがつくった明治の言葉であり、「西洋絵画との区別」のために発明された言葉なのだそうです。絹谷香菜子さんは「日本絵画の精神は、その言葉が誕生する以前にある」と語ります。

象形文字の簡略化の経緯やひらがなの成り立ちに触れ、日本の心象風景に眼を向けます。柱と襖の日本の伝統建築の構成にも触れ、「何よりも柱や襖の向こうにある本物の自然が美しい。絵画は写実よりも簡略化やコンセプトが大切」と説きます。

絹谷香菜子さんはこれからも「考え続け」そして「世界とつながり続ける」のでしょう。

講演中に何回か「何を言いたかったのかな…すみません、結論が見えなくなりました」と息継ぎする実直なお人柄と共に、会場で配布された作品集のタイトル「A Part of Me」がそのことを物語っています。

「世界の人々、生きもの、地球は私の一部であり、私の一部は彼らの一部であることに思いを馳せました」との言が作品集でも紹介されています。素粒子の世界では世界は溶け合っていると解釈されるそうです。私たちの身体でさえ一定ではなく、細胞は分解され体外に溶け出しているのです。正に世界は「A Part of Me」。

「世界の観察者」である絹谷香菜子さんは、これからも「世界とつながり続ける」ことでしょう。絹谷香菜子さんの益々のご活躍を祈念差し上げながら、講演会のご報告の筆を置かせていただきます。



『戦争を止めよう Stop the Tank 2022』制作風景



『戦争を止めよう Stop the Tank 2022』

会員交流委員会だより

陣内秀信先生の案内で巡る 「船上から東京を見上げる会」 に参加して

三菱地所設計
日本建築美術工芸協会法人会員
大草徹也



あび清総合計画
竹内 泰



aaca 交流委員会の特別企画、陣内秀信先生の案内で巡る「船上から東京を見上げる会」が4月11日に開催された。コースは両国から天王洲まで。大きく4つのエリアに分かれている。①両国から水道橋まで神田川を西に遡上し、②水道橋から東に日本橋川を下り、亀島川を經由し、隅田川に至り、③佃島を左に眺め隅田川を南下し、④竹芝から天王洲まで運河を行く2時間のクルーズである。出発は15時、天気は見事な快晴。少し風はあったものの、空気もすっきりと澄んでいた。よほどの晴れ男と晴れ女たちが集まったのだろう。ほどなく陣内先生も登場し、クルーズへの期待感が一気に高まった。ほぼ定刻に水面輝く隅田川へ、船は静かに出航した。

神田川の河口、最初の橋は柳橋である。柳橋から浅草橋、左衛門橋付近までには多くの屋形船が係留されており、川に張り出した船宿の木の杭柱が林立する普段では見られない不思議な光景が神田川の両岸に広がる。陣内先生の解説によると、かつては、柳橋から船に乗り隅田川上流の料亭に着けて遊ぶのが本来の遊び方だったそうだ。今は隅田川沿いの料亭は、ほとんどマンションなどに建て替わってしまっており、残念ながらかつての遊び方は変化しているとのこと。



柳橋の屋形船と船宿

間口の狭いオフィスが建ち並ぶ秋葉原付近を抜け、しばらく進むと、両岸が次第に高くなり渓谷のような深い堀となる。御茶ノ水に近づいたことが分かる。進む船の先には聖橋が現れ、その前を真っ赤な丸ノ内線が横切る。高低差のある都市



聖橋と丸ノ内線

的な景観を水面から眺められる神田川のハイライトである。この深い堀は、江戸の初期に水害回避のために人工的に掘られたものであるとのこと。これらを構築した人々の偉業に思いがめぐる。一同しばし無言となり、そのダイナミックな地形に圧倒され、ため息がもれた。

船はさらに進み、右手に後楽園を眺めながら折り返す。日本橋川に入ると上空は急に首都高に覆われる。かつての水運の活況が、現代では陸運となって宙に持ち上がり、川は少し寂しく静かに流れていることが実感される。しかし、日本橋川を下るにつれ、首都高と水面の関係は広がったり狭まったりと、意外と躍動的な景観であることがわかる。普段は橋を渡るだけのため、このような連続的な変化は感じられない。景観論争の争点となりがちな首都高ではあるが、これらも既に東京の景観の一つとも言えよう。また、日本橋川の護岸も江戸時代から現代に至る様々な時代のもものが折り重なっているのが観察できて楽しい。多くはコンクリートにより補強されているが、施工時期によっては緑化されるなど、工夫の変化も見ていて面白い。江戸時代の石垣を切り裂き、首都高の柱が建てられている部分もあり、当時の力強い都市化のパワーと、配慮されなかった歴史的建造物とのちぐはぐなコンビネーションが、図らずも現代の新たな景観となっている。

しばらく下ると、次第に川幅が増し、東京都で最も古い石橋である常磐橋が見えてくる。その左側には日本銀行、更には日本橋エリアの高層建築が連なる。江戸、近代、現代が一望できるスポットである。ここで陣内先生が、日本銀行の正面が川に向いていることを指摘された。それは、近代においても、舟運が東京の都市形成において重要な役割を果たしていた証左であり、日本橋川沿いに残るその他の近代建築の多くが同様に川との関係を意識して設計されていること、しかし、特に戦後、舟運が陸運に転換するに従い、建築物が川に背を向けて建設されてきた経緯を解説された。同時に、東京の川辺の空間はもっと評価されるべきであり、川に近いフロアを一般にも開放される機能へと転換し、より多くの人々が豊かな空間を享受できるよう都市政策としても取り組んでいくべきと力強く提言された。先生自身、幾度となく公的な場で提言されてきたが、容易には変わらない、



常磐橋と日本銀行と高層ビル

変えていけない川辺の空間作りの難しさを一同は共有した。

常磐橋をぬけ、常盤橋、一石橋、西河岸橋をこえると、いよいよ五街道の起点、日本橋である。日本橋上空に架かる首都高は1964年のオリンピックの前年に建設され、2020年のオリンピック誘致決定を受けその前年に地下化の事業決定がされた。日本橋地域の人々の長年の活動が功を奏したといえよう。撤去完了は2040年を予定され、まだまだ先ではあるが、一同は取り払われた首都高を想像しながら日本橋を見上げた。



日本橋を見上げる参加者

茅場町で首都高が左へ折れ、再び広い青空が広がる。船は右手の亀島川に入る。亀島川には両方に水門があるため、亀島川の沿いの堤防は低く、建物がぐっと水辺に近い。公設の船の係留所も整備され、水際も緑化されている。亀島川では定期的に親水イベントも行われているようだ。

亀島川水門をくぐると、視界が一気に開け、スケールの大きな隅田川の景観になるとともに、目の前には佃島の高層マンション群、勝どきから芝浦の高層ビル群まで一望される。隅田川は佃島の開発を皮切りに、スーパー堤防によって水害対策と併せて水辺利用が段階的に整備されてきた経緯が解説された。勝鬃橋では、当時、まだ橋げたが開閉する様子をスケッチにいられていた陣内先生の幼少の思い出も併せて語られた。

東京湾に近づくと次第に風と波が強くなり、船は木の葉のように上下に揺れながらゆっくりと南下した。そのわきを大型観光船が悠々と追い抜いていく。お互い笑顔で手を振りあったが、こちらはきつと危なっかしさ交じりの笑顔だったに違いない。

古川を右に眺めながら、竹芝の運河に入ると、嘘のように風も波も穏やかになり、順調な航行が再開した。運河沿いには倉庫が多く残り、現役の荷揚げ場もある。運河から荷物を吊り上げるホイストもあり、今も運河が水運利用されていることが分かる。運河に沿って歩行者空間がしっかりと整備されている。しかし、現役の荷揚げ場以外にも、ところどころ途切れている部分がある。歩行者と住民の見合いから合意がま

だ形成されず整備できていない部分だろうとのことであった。陣内先生お勧めのイタリア料理店の前を通過。店主ともお知り合いで、水景を楽しめるような店舗づくりを頑張ってらっしゃるとのことであった。個々の試みは小さくとも、水辺の魅力の人々と共有していこうとする動きを陣内先生は高く評価されていた。

普段は接する機会のない東京の水辺空間を、ただ眺め巡るだけでも楽しいはずであるが、今回は陣内先生と一緒に巡ることのできる特別の機会となった。江戸から現代に至る人々の水を介した営みの重なりを丁寧に解きほぐし、見えないものまで見えてくるような感覚にさせるしてくれる陣内先生の名解説をライブで聞きながら巡ることができたことは、参加者全員の喜びであったに違いない。我々を東京の水辺の歴史旅に導いてくださった陣内先生に心より感謝を申し上げたい。



東京の水辺空間と陣内先生

ほどなく、天王洲に到着したころには、日は傾き、運河を黄色く染め始めていた。懇親会には絶好のタイミングで、参加者の多くは、会場の運河沿いのレストランへと流れていった。懇親会では参加者の充実した笑顔が溢れていた。その満ち足りた笑顔は、この企画をされた方々を何より癒したに違いない。今後の交流企画にますます期待が膨らむ。



夕日のなかの懇親会

会員増強委員会だより

第8回 aaca サロン開催報告

ランドスケープとライティングデザイン それぞれの環世界

株式会社 梓設計 アーキテクト部門
チーフアーキテクト
山田修爾



ヤーコプ・フォン・ユクスキュルが提唱した「環世界」。世界は1つの環境ではなく、生物各々が主体的に構築する独自の世界であるというこの概念は、異なる生物同士だけでなく、職能によって、さらには個人によって異なる環世界を持っていると言えます。今回はランドスケープデザイナーの堀井さん(Landscape81)、ライティングデザイナーの麻田さん(Genius loci & Lighting Design)をお呼びし、両氏のプロフェッショナル領域における環世界を覗かせて頂きました。

堀井さんの環世界では、敷地周囲やその奥に広がる風景との関係性そのものに視座を置きます。

レジャーリゾート旧軽井沢(ペット同伴ホテル)においては、軽井沢の美しい借景を取り込み、建築と周辺環境を同化させるだけでなく、ペットとシェアするホテルという世界観を拡張させ「周辺の動植物とシェアするランドスケープ」の視点で再構築。堀井さんにとっては小さなリスもプロジェクトの一員になります。

宇部市ときわ動物園では中南米のクモザル等の展示エリアをご担当。中南米と宇部市という異なる環境下で、生息地を純粋に再現することは困難です。そこで「背後に南国」をキーワードに展示スペースの遠景や中景に南国の植生で形成し、手前にはメンテナンスにも配慮した日本の植生で整理。日本庭園の遠近法のように整理することで、シークエンスの中で南国を感じ、動物越しの借景としての南国を提供しています。

上野動物園パンダのもりでは「上野の主演であるパンダはどこからでも見えなければいけない!」ための園路と展示スペースの地形操作が特徴的です。展示スペース際の園路を最も低いV字型の地形とすることで、死角の無い展示計画と、その奥に上野東照宮を仰ぎ見るダイナミックな風景をつくっています。

麻田さんの環世界では、SNS的な写真のフレームでは捉えきれない「状況の体験」を提供しうる光空間に視座を置きます。

NOBORITO GATE BUILDING(テナントビルと2世帯住宅の複合建物)は、2つの住戸とその間の中庭、そして奥の街の風景が連続的に繋がる抜けのある空間構成が特徴的ですが、光環境としては壁面を照らさず家具のみを照らし、連続性をカット。そうすることで周囲の街の風景のように点在する光と呼び寄せ、光環境として都市との連続性をつくりだしています。

シネジック新社屋は、平面トラスと三角形のCLTパネルによる大空間が特徴的なプロジェクト。

床面への十分な照度が求められたため、複雑に変形する架構に対し、ダウンライトをワイヤーで吊るすだけのシンプルなデザインで整理。このシンプルさによって既視感の無い不思議な空間となっています。

ZOZO 本社では繊維のように小さな木材で覆われた大きな大空間が特徴的な空間に対し、その木材のディテールの中に光源が全く見えないように照明を配置。大きな天井面を直接照らしたくなるどころ、絞り込んだ床面への照明とその反射による仄かな光に照らされた天井面が、住宅に囲まれた静かな周辺環境に対して行燈のような光を提供しています。

ディスカッションの中では、とある煌々と照らされた樹木の写真に対し、そもそもこれは樹木が主役なのか?という議論に。

小さなベンチを照らす外灯と、その奥に薄らと見える樹木の写真には、お二人とも「こっちのほうがいい!」(私も!)という瞬間が印象的でした。主役は利用者(或いは人のいる風景)というお二人の環世界が重なる瞬間でもありました。それぞれの職域や見る目、環世界が異なっても、その先に見たい風景を共有していく作業、共有できた瞬間は、デザインに限らず心が躍ります。

次回のサロンでも新しい環世界を覗き見れることを楽しみにしたいと思います。



シネジック新社屋



上野動物園パンダのもり



NOBORITO GATE BUILDING

広報委員会だより

青森県立美術館で書家丸山耽奎為会員の個展が開催されました

広報委員会

書家で日本画家の丸山耽奎為会員の個展が青森県立美術館で2月7日から14日まで開催されました。オープニングのテープカットには、本展覧会を後援しました当協会の東條隆郎会長も参加されました。またボツワナ共和国のホツイレエネ・モラケ駐日大使も参加されました。ボツワナ共和国はアフリカ南部の内陸に位置し、北部は熱帯気候が広がる国です。丸山会員とのつながりは、2013（平成25）年、丸山会員がボツワナ共和国日本大使館から招聘を受け、弟の故丸山祐哉貴（ちやき）氏と共にボツワナ大学で書のデモンストレーションを行ったことに端を発し、以来現地学生に書や絵の指導をするなど、ボツワナ共和国との縁が続いています。

「今日の低迷する日本において心痛めていたところ、日本人のルーツである縄文の地にある青森県立美術館に縁をいただき開催の運びとなりました。日本を応援する絵の発表をできたことは喜びです。

今回の個展の目玉は20点の桜、天まで届けタイトルの縦7メートル横5メートル作品です。大作製作の為に沼津の山の中の場所を3ヶ月借り切り、トレーニングしながらの毎日、その場所は偶然にも眼下が縄文遺跡でした。

遥16000年前から始まったとも言われる縄文時代、その縄文中期に繁栄した三内丸山遺跡の隣にあるこの美術館は、青森県内外から多くの人たちが訪れ、賑わいを見せている美術館です。

立ち上がれ日本、縄文の日本。私達の祖先は、この時代から宇宙と繋がり、豊かな自然に感謝し、愛と調和を持って長い間、平和に暮らしてきました。日本文化はこうした先人達の寛容で穏やかな精神を基本として、今日までDNAに引き継がれてきました。この歴史深い地で開催できます事は、この上もない喜びです。」（丸山耽奎為）



レセプションでの
テープカット



ホツイレエネ・モラケ
駐日大使を囲んで



桜、幸あれ



幸福桜



大桜・ブルー

一 報 一 心からお悔やみ申し上げます。

名誉会員 澄川喜一

4月9日逝去 享年91歳 日本文化研究所主宰

略歴 1931年 島根県に生まれる
 1951年 山口県立岩国工業高等学校機械科卒業
 1956年 東京藝術大学彫刻科卒業
 1981年 東京藝術大学教授
 1989年 東京藝術大学美術学部長
 1995年 東京藝術大学学長
 協会歴 名誉会員 理事 (1993～2003年)、副会長 (2004～2013年)
 作品 東京湾アクアライン川崎人工島「風の搭」、東京スカイツリーのデザイン監修を務めるなど、全国に野外彫刻・環境造形を多数手がける
 受賞・受章歴 現代日本彫刻展野外彫刻美術展賞、毎日新聞賞、平櫛田中賞、中原悌二郎賞、本郷新賞、吉田五十八賞、日本芸術院賞、NHK放送文化賞などを受賞、紫綬褒章受章、紺綬褒章受章、文化勲章受章、日本芸術院会員、文化功労者、



会報の取材を受けられた澄川喜一先生 (2017年11月24日)

日本建築美術工芸協会名誉会員の澄川喜一先生は彫刻家を目指した経緯を「私は戦時中に小学校（当時は国民学校）を卒業し山口県岩国工業学校（旧制）の機械科に入学しました。岩国市を流れる錦川に架かる名橋錦帯橋に魅せられスケッチを続けていました。周辺の川や山を背景に五つのアーチ橋は見事な絵のようで建築家か彫刻家になりたいと思い始めました。」と語っています。そして、東京藝術大学で平櫛田中と菊池一雄から塑像と具象彫刻の基礎を徹底的に学び、卒業後は美術学部助教授、教授、学部長、学長を歴任され、2001年から東京藝術大学名誉教授とされました。

澄川喜一先生は、当初具象彫刻を手がけられましたが、それから一度離れて抽象彫刻に移られ、木や石など自然素材に対する深い洞察を経て、日本固有の造形美と共鳴するような抽象彫刻「そりのあるかたち」シリーズを手がけ、日本を代表する作家となりました。そして1980年代以降は、野外彫刻や環境造形の分野にも活動の幅を広げ、日本国内に数多くの公共彫刻、記念碑、環境造形を残されました。



同左

編集後記

日本建築美術工芸協会名誉会員の澄川喜一先生が逝去されました。澄川喜一先生は、日本を代表する彫刻家で、「そり」と「むくり」を制作の根底に据え、60年以上にわたり作家活動を続けてこられました。東京湾アクアライン川崎人工島のデザインや東京スカイツリーのデザインは、国内外に澄川喜一先生のお名前を広げることになりました。広報委員会では、会報79号（2018年4月発行）の時代の華一輪「そりのあるかたち～澄川喜一先生におきさす」掲載のため日本文化研究所のオフィスにお邪魔してお話を伺うことができました。先生からは次から次へと楽しいお話が続き、楽しく、そして貴重な思い出となりました。心からご冥福をお祈り申し上げます。（飯田郷介）

aaca 2023.7 no.95

発行人 会長 東條 隆郎
 発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
 〒108-0014
 東京都港区芝 5-26-20 建築会館 6階
 TEL 03-3457-7998 FAX 03-3457-1598
 URL <http://www.aacajp.com>
 E-Mail info@aacajp.com

編集 広報委員会
 委員長 飯田郷介
 副委員長 田島一宏
 委員 石田真人 勝山里美 金原京子
 竹生田正 中村弘子 森田高年
 山崎和子 山下治子 吉田 誠

編集制作協力 株式会社 アム・プロモーション